# 贾岛的创作态度

北基行 訳

中国　西安市　碑林博物館近くの唐院門

## 賈島の創作態度

北京市傘下に属する今の区や県から、史上に名が残る有名人が多くでている。それも、文武両道にわたり、百単位の数となるだろう。その中で筆頭は、唐の大詩人、賈島である。『旧唐書』や『全唐詩話』及び、蘇綽が賈島の為に書いた墓志銘の碑文によると、賈島は范陽郡に生まれた。唐代の范陽郡は、ざっと現在の大興、房山、昌平、順義の各県をたした範囲で、これが幽、燕と呼ばれる地域である。春秋戦国時代、ここに豪傑英雄が雲集し、時世を悲運慨嘆する気風が土地にしみついた。賈島がこのような五言絶句を残している。“十年一剣を磨く、霜刃未だ曾て試さず。今日把って君に示さん、誰か有らん不平の事？　”　心情を余すところなく吐露したいい詩だ。

しかし、賈島の名を世に知らしめたのは、英雄豪気ではなく、苦吟であった。おなじみの“推敲”の典拠は、彼の日常にあった。“僧敲月下门”の句を、“僧推月下门”と比べてどちらを住とするか。いうまでもなく前者であるが、これが用字“推敲”の重要性を説明するお手本となった。“推敲”の重要なことは分かるが、それだけが出来ると、苦吟の詩人と呼ばれるのか。そんな甘いものでない、それでは大詩人の名が泣くというものだ。

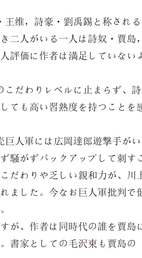
苦吟と呼ばれる賈島の詩には、練意、練句、練字など全般にわたり万全の工夫がこらされた上に、思想や時代性が作品に練り込まれている。彼の詩でまず気付くのは、作品に見え隠れする練意のあとだ。そこに不思議な力が湧いて人を詩境に引き込むのだ。詩境が劣れば、蛾を蠅のようなもので、読んでも興ざめして、こんな詩は無いほうが助かると思う。詩興が浮かぶと、それを字句のうえにどう反映させるかだ。賈島の詩句はどれも練りに練られ、推敲のうえに推敲が加えられている。しかも、ごくあたりまえに、一気呵成になった如く、推敲の迹を残さない。このように見てくると、苦吟とは作者の作詩技巧についていうもので、作者は、鑑賞者にこの苦行の迹をみせてはならないのだ。

賈島（かとう　779年生れ・843年8月27日没　中国・唐の詩人。幽州范陽県（現在の河北省保定市涿州市）の出身

このことが賈島の数多い作品より証明できる。例えば“渡桑干河”では、“井州に客会して己に十霜、歸心は日夜　咸陽を他う、無端更に渡る桑干河，却って望む　井州は是れ故郷。”　詩意は曲折しているが、字句はいたって平易である。平易であるから含蓄する対象を浮かび上がらせ、読者はこれを味わうために反復咀嚼する。字数を二、三倍に増やし、包み隠さずすべてをさらけだすと、却って味気ない。賈島の詩は、どれも風趣に富み、どの詩を例に挙げて、深淵なる含蓄を説明するべきか、私は迷う。

韓愈が賈島を高く評価したことは、中国文学史をかじった人ならご存じだろう。『全唐詩話』が記すところの韓愈が賈島に贈った詩はこうである。“孟郊死して葬す　北邙山、日月星辰顧に闇を覚ゆ。天　文章の中断絶を恐れ、再び賈島を人间に在て生めり。”この詩は韓愈のものでないという人もあるが、その時代が下した賈島への評価をよくあらわしている。後の人は、なにかと“險僻”の二字で賈島の詩を評価するが、これはまったく当を得ていない。

賈島の詩が後世の詩壇に悪影響を及ぼしたと、証拠を突き付けてそもる人がある。例えば、宋代には江湖派と呼ばれる一派が、明代には竟陵派が、清代末の同、光年間に流行した詩体が、ひたすら奇字険句を追求して、内容に乏しく、形式主義に走ったのがそれだという。後世の人が犯した過ちを、賈島の影響によるとして罪を全て彼にかぶせるのは、公平ではない。各時代の詩歌流派の優劣評価は、当然その時代の歴史条件と社会背景に求めるべきであり、後人が犯した失敗を、先人の罪として擦り付けてはならない。今日我々は、厳粛な賈島の創作態度を、おおいに学ばねばならない。しかし、賈島を表面的に追及、模倣する人が現れ、悪趣味の詩を垂れ流そうとも、それは賈島の責任に帰すことは出来ない。



桑干河（そうかんが）は中華人民共和国の山西省北部と河北省西北部を流れる河川。桑干河という名は、特有象の漢方物すを結果になると川が詰れることからきているとされる。

【 掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ 】

## 「賈島の創作態度」ひとそえ

「詩仙・李白、詩聖・杜甫、詩魔・白居易，詩佛・王維，詩豪・劉禹錫と称される中で、詩を玩び、玩んでは酔う如く、痴に到るが如き二人がいる一人は詩奴・賈島，もう一人は詩鬼・李賀である」この種のざっぱくな詩人評価に作者は満足していないようです。

賈島に対しても、「推敲」の語源に関した言葉へのこだわりレベルに止まらず、詩作の練度への深い考察を通じて、作者が詩の読み手としても高い習熟度を持つことを感じさせる文章が続きます。

この文章が書かれた 1960 年代の初め、日本の読売巨人軍には広岡達郎遊撃手がいて、後輩の長嶋茂雄三塁手が取りそこなった打球を慌てず騒がずバックアップして刺すことで名手としてならしました。ただ名人にありがちなこだわりや乏しい親和力が、川上一塁手（監督）に疎まれ、排除されて退団に追い込まれました。今なお巨人軍批判で健筆を振るっている広岡氏にも「険僻」があるようです。

賈島の「険僻」は詩奴に通じて詩作を下げていますが、作者は同時代の誰を賈島になぞらえ擁護しているのかがこの文章の要でしょう。書家としての毛沢東も賈島の『馳江上呉処士』を書き残しています。

井上邦久

### 贾岛的创作态度　原文

現时北京市所属各区、各县，在历史上曾经出现了许多著名的人物，有文有武，数以百计。其中有一个著名的大诗人，就是唐代的贾岛。

据《旧唐书》、《全唐诗话》以及苏绰为贾岛写的墓志铭等的记载，贾岛是当时范阳郡的人。唐代设置的范阳郡，包括现在的大兴、房山、昌平、顺义等县。这一带早在春秋战国时期，属于幽燕之地，英雄豪侠慷慨悲歌，成了传统的风气。正如贾岛在一首题为《剑客》的五言绝句中写的:“十年磨一剑，霜刃未曾试；今日把示君，谁有不平事？”（一剣の事にそなえて十年剣を磨いてきた、このやいば、まだ使う機会がない。お望みなら、そいつをお見せしましょう、不平のあるやつ、出てこい！）这位诗人显然想借此来表达他自己的心情。

然而，贾岛之所以成名，却并非由于他的英雄气概，而是由于他的苦吟。人们最熟悉的“推敲”的典故，便是出于此公身上。毫无疑问，写“僧敲月下门”当然比“僧推月下门”的句子要好得多。这几乎已经成了讲究练字的一个最寻常的例证。可是，懂得这样一些起码的文字“推敲”的技巧，难道就可以称得起是一位苦吟的诗人了吗？问题当然不是这么简单。否则，成为一个大诗人也太容易了。贾岛的苦吟，实际上在练意、练句、练字等方面都用了一番苦工夫。而这些又都是与作品的思想内容和时代性分不开的。首先我们看到贾岛非常用力于练意，因而他的作品具有引人入胜的意境。如果写一首诗而意境不佳，味同嚼蜡，叫人读了兴趣索然，那就不如无诗。有了好的意境，然后还必须保证这种意境能够在字句上充分表达出来。贾岛的每句诗和每个字都经过反复的锤炼，用心推敲修改。但是到了他写成之后，却又使读者一点也看不出修改的痕迹，就好象完全出于自然，一气呵成的样子。由此可见，所谓苦吟只能是从作者用功的方面说的，至于从读者欣赏的方面说，却不应该看出作者的苦来。

贾岛有许多作品都可以证明这一点。例如《渡桑干河》的诗写道:“客舎并州已十霜，归心日夜忆咸阳。无端更渡桑干水，却望并州是故乡。”（異郷并州に来て十年ホたつ、帰心日ごとつのり夢は咸陽に通う。用もなく桑乾河渡って、ふと并州を振り返ると、なんと并州をわが故郷と思った。）这首诗的意思很曲折，而字句却很平易。这样就显得诗意含蓄，使读者可以反复地咀嚼它的意味。如果多用一两倍的字句，把它的意思全都写尽，读起来就反而没有意思了。在贾岛的作品中，象这样的例子太多，我简直不知道应该举出什么例子才更好说明问题。

谈过中国文学史的人，都知道韩愈非常赏识贾岛的作品。《全唐诗话》记载韩愈赠贾岛诗曰:“孟郊死葬北邙山，日月星辰顿觉闇。天怨文章中断绝，再生賈岛在人间。”（孟郊が死し北邙山に埋葬され、世界はおもしろくなくなった。天は、地上に文章が途絶えることを恐れたのだろう、賈島お前さんは、孟郊の生まれかわりとしてこの世に送られてきたのだ。孟郊、賈島；ともに韓愈の友人、五絶にすぐれた。）虽然有人说这不是韩愈的诗，但是这至少可以代表当时人们对贾岛的评价。后来的人常常以“險僻”二字来评论贾岛的诗，那实在是不恰当的。

尽管人们也能举出若干证据，说明贾岛的诗对于后来的诗坛发生了不良影响。比如，宋代有所谓江湖诗派，明代有所谓竟陵诗派，以及清末同、光年间流行的诗体，一味追求奇字险句，内容贫乏，变成了形式主义。如果把这些都归罪于贾岛的影响，我以为这是不公平的。各个时代诗歌流派的优缺点，主要的应该从各该时代的历史条件和社会背景中寻找根源，前人不能为后人担负什么责任。贾岛的创作态度是很严肃的，这一点直到今天仍然值得我们学习。假若有人片面地和表面地模仿贾岛，以致产生了坏诗，这怎么能叫贾岛负责呢！